

女性アナウンサーの八〇年代

—「アナウンサーらしさ」の改革の後で—

はじめに

女性アナウンサーがテレビで活躍するようになって久しい。

週刊誌に「女子アナ」を取り上げる記事が躍り、テレビ局が自局の女性アナウンサーを売り出そうとして躍起になるといった事態は今や見慣れた光景である。こうした女性アナウンサーたちが注目される現象・いわゆる「女子アナ」ブーム^①は一九八〇年代後半に始まるとされる。

「昔は美人、才女^②というのはスチュワーデスの代名詞だったのよ。あの人たちが出てきてから、あーん、影が薄くなるばかり」

この台詞は、八九年に発表された小説『幕はおりたのだろうか』^③のなかで、作家・林真理子がスチュワーデス（客室乗務員）^④の女性に比べやかせたものである。なるほど確かに「あの人たち」が出てくる以前の「才色兼備」の象徴的職業といえば航空会社の客室乗務員であった。そして、ここである「あの人たち」とは、女性アナウンサーたち^⑤のことである。

「女性の時代」といわれた八〇年代には、テレビ報道の現場にも女性アナウンサーが登用されるようになり、女性ニュースキャスターは「才色兼備」の象徴となった。

女性アナウンサーの八〇年代

また、バラエティ番組や情報番組でタレント顔負けの活躍をみせたのも女性アナウンサーたちであった。

「女子アナ」ブーム^⑥の始まりである。

「女子アナ」と呼ばれるアナウンサーたちは、いずれも若く美しく、日々のテレビ画面を彩る存在である。そして、この「女子アナ」ブーム^⑦は、女性アナウンサーたちを「女子アナ」というそれまでとはまったく違う存在に変容させた。彼女たちは芸能人並みに恋愛や結婚といったプライベートな話題で取材される対象となったのだ。実際、プロ野球選手など各界著名人との結婚が続々と報じられるようになったのも八〇年代後半以降である。

そもそも「女子アナ」という呼称は、女性アナウンサーに対する社会的な呼び方が、男性向け週刊誌を介して一般化したものである。女性アナウンサーではなく「女子アナ」という、この良くも悪くも軽やかな呼称にはどのような意味が付与されているのだろうか。

馬場伸彦（二〇一二）は、ある語が風俗的現象としてメディアにぎわせているときには、しばしば語義を逸脱して隠喩的に「意味される」ことがあると述べている。「ある現象は常に文化的・社会的な意味の体系によって構成され、理解」される。かつてブームとなった女子高生や女子大生とは、「他者である男性が記号として意味づけた身勝手な幻想」なのであり、「それは商品として流通することさえあつ

北出 真紀恵

女性アナウンサーの八〇年代

た」ものだ。馬場はそれを「換言すれば、実態とはかけ離れた、男性にとって都合のいい隠喩だった」(馬場、二〇一二・一〇)と述べている。この文脈に従えば、「女子アナ」という記号もまたその延長線上にあり、「女子アナ」もまた「男性にとって都合のいい隠喩」であり、「記号」ということになる。

そもそも「女子アナ」たちはあくまでもテレビ局という企業に勤める会社員である。だが、この「会社員」であるというところが「女子アナ」たちの商品価値であるらしいのだ。^③

本稿では、こうした女性アナウンサーをとりまく現状について、アナウンサーという職業における専門性のゆらぎ、そして、それまでの女性アナウンサーをめぐる雇用の問題について整理し、どのような背景が「女子アナ」を誕生させる要因となったのかを再考してみたい。

女性アナウンサーのタレント化はメディア史が振り返るように、フジテレビが女性アナウンサーにアナウンサーの枠を超えさせたことに始まるとされている。テレビ局がこぞってそのブームに乗りかかると、若手女性アナウンサーたちを自前のタレントとして商品化し、現在に至っているという経緯に間違いはなかるう。しかし、筆者は、瓜生吉則(二〇〇九)が、そのきっかけとなったフジテレビでの「女子アナ」誕生の背景に、アナウンス部の所属変更と女性アナウンサーの採用問題という下部構造があったことを指摘していることに注目したい。

八〇年代という時代は、アナウンサーという職業人たちも自己改革の必要に迫られていたものであり、アナウンサーのあらたな職能の開発に向けた挑戦がなされていた。「女子アナ」ブーム誕生という結果は、そうした挑戦のひとつの、実は「意図せざる結果」でもあるのではないか。

筆者は、アナウンサーという職業を志し、残念ながら「女子アナ」になる機会には恵まれなかったが、四半世紀にわたり放送メディアの現場で女性アナウンサーとして業務を担当した。

本稿は、筆者の経験知を交えつつ、女性アナウンサーというジェンダー化された職業をめぐるひとつの考察である。

一 「アナウンサーらしさ」の改革

まずは、アナウンサーの職能の変遷による、アナウンサーたちの苦悩についてみていきたい。

アナウンサーがアナウンサー職という専門職として放送局に終身雇用され、ニュースも読めば他ジャンルの番組も担当するなどという勤務形態をとるのは日本独特である。歴史的に見れば、アナウンサーという仕事は放送メディアとともに誕生した新しい仕事であった。アナウンスの表現技術は最初から所与のものとして存在したのではなく、草創期のアナウンサーたちによって模索され、開発され、洗練化されてきた。アナウンサーたちにとって放送九〇年の歴史は、共通語(標準語)とは何か、放送にふさわしいことばとはどんなものか、アナウンスはどうあるべきか、アナウンサーの職能とは何かといった問題群との苦闘の歴史でもある。^④

アナウンサーの職能とは、情報を正確な日本語(共通語)で伝えることが第一義とされる。正しい発音、正しいアクセント、そして一言一句間違ふことのない正確なよみ。^⑤ アナウンサーの訓練とは、まずは標準語(現在は共通語)の会得であった。放送局の増加とともにアナウンサーも増加する。アナウンスの訓練も洗練化されていき、規格化されたアナウンサーたちが大量に出現する。当時のアナウンサーたちには「標準語を普及させ、日本語を良くするという社会的な任務」(日本放送出版協会、一九五五)が課せられており、アナウンスは「主観を入れない」ものとされた。ところが、皮肉なことに、訓練によって個別の癖を排除した「個性」のなさゆえに、訓練された「アナウンサーらしさ」への批判が高まってくることになる。

大宅壮一（一九四九）は、草創期のアナウンサーを「日本の知識人が携わっている職業のなかでは、もっとも新しい部類に属するもの」であるとし、そうした新しい職業のフロンティアであった初期のアナウンサーたちの「型」をつくりあげてゆくプロセスのなかでの「個性」を再評価したが、同時に、「型」ともいうべき「アナウンサーらしさ」に対して次のような痛烈な批判をしている。

戦時中大いにもてはやされた前者（雄叫び調）アナウンス…引用者注）が戦後姿を消し、いまは淡々調一色でぬりつぶされていることはいうまでもない。（中略）かれらは声ばかりでなく、人間そのものにまで、NHKのマーク入りのはっぴといつて悪ければ、マスクをかむっているとは思えない（大宅、一九四九―一九八一）。

こうした「アナウンサーのよみは皆同じに聞こえる」という批判が出てきた背景には、放送メディアに対する人々の関心の高まり、民間放送の開局とその比較、そして、アナウンサー以外の放送出演者の増加といった背景があった（北出、二〇〇八）。その意味で、アナウンサーにとって「アナウンス技術」と「タレント性」（個性）との相克は、決して最近の問題ではなく、アナウンサーという職業それ自体に内包する問題なのである。

放送番組が短時間で台本がきっちり決められている草創期は、台本を間違えずによむアナウンサーで対応できた。六十年代、七十年代を通じてテレビというメディアは大きく発展を遂げ、コンテンツとしてはワイドショーという番組ジャンルが隆盛する。テレビが長時間の生放送の時代になったとき、型通りに「主観をいれずに」原稿を読むことしかできないアナウンサーたちは役不足である。臨機応変に対応するという訓練を受けてもおらず、また経験もない。自らのことばで語り、自由な感想を述べることはできるのは、タレントたちであった。

女性アナウンサーの八〇年代

こうなると、番組司会業というそれまでアナウンサーの分野とされた仕事もタレントたちにとられてしまう。

そもそも、アナウンサーは『真面目』で『正しい日本語を話す』プロというイメージで、人前に出ながらも目立ちすぎてはならない職業（稲増龍夫、二〇〇九）であったのだが、テレビの成熟期を迎え、テレビ出演者のボーダレス化が進むと、アナウンサーはテレビのわき役へと追いやられてしまった。アナウンサーたちは、それまでの「アナウンサーらしさ」への批判を受けとめ、アナウンサーという職業の生存をかけて、アナウンサーらしさの改革へ、そして、アナウンサーの個性への探求が盛んに模索されてゆくことになる。

八〇年代には、たとえば、日本テレビの「徳光和夫／小林完吾」が対照的な「おもしろ／まじめ」アナウンサーとして人気を博し、フジテレビでは逸見正孝アナウンサーが夕方のニュース番組を担当すると同時に同局『夕焼けニャンニャン』で軽妙なやりとりを披露して人気が沸騰するなど、「アナウンサーらしさ」を攪乱することによってスターアナウンサーたちが登場することになった。また現在はニュースキャスターを務める古館伊知郎（テレビ朝日）も従来の実況アナウンスの枠を超えたドラマチックなアナウンス表現で、プロレス実況アナウンサーとして注目を集めた。アナウンサーたち自身による「アナウンサーらしさ」の改革は、八〇年代、一気に加速することになった。

二 女性アナウンサーたちの「冬の時代」

次に、女性アナウンサーたちが注目される以前の、女性アナウンサーをめぐる状況について触れておきたい。

かつてのテレビのアナウンサーの仕事といえば、一部のスターアナウンサーを除き、定時ニュースのよみや番組ナレーション、提供枠のよみといった地味な仕事が多く、とくに女性はニュースを担当するこ

女性アナウンサーの八〇年代

ともなかった。報道のジャンルは男性の世界で女性は排除されていた。女性がニュース番組に登用されるのはおもに八〇年代になってから、テレビの黒子的役割を担っていたといつてよい。顔出し^⑤も少なかった。

放送メディアの草創期には少ないながらも男性同様に採用された女性アナウンサーの活躍が見られたのだが、高度経済成長時代は女性アナウンサーにとって決して良い時代とはいえなかったのだ。

小玉美意子（一九九六）は、その時代を女性アナウンサーにとって「冬の時代」であったと指摘している。一九六四年までは東京オリンピックに備えるためとテレビの成長期が重なり、男女ともかなりの採用を行っていたが、オリンピック後は全体の採用が激減した。不況の雇用調整は女性によって行われるのは常である。女性の採用はなし、あるいは縁故者をほそぼそと採用するか、高卒・短大卒の女性だけを採用するという時代が続いていた。放送業界においては、女性職員の採用は男女雇用均等法が施行される八六年まで手控えられることになった。七十年代から八十年代にかけて、女性アナウンサーという仕事には正社員での採用はなし、契約制や嘱託で採用されたとしても大した仕事がないというのが現状であった。数年で退職することが決まっている女性アナウンサーが会社の命運を賭けるような重要な番組に登用されるわけがない。七八年に始まったフジテレビのローカルニュース『FNNニュースレポート6・30』は女性キャスター番組の草分けとされるが、そのキャスターである田丸美寿々氏もニュースをやるまでの三年間は天気予報やお茶くみぐらいしかすることがなかったと述べている。八〇年代に入るまで女性アナウンサーに限ってはそれとほとんどのが契約社員であるなど、女性アナウンサーをとりまく環境は決して現在のように華やかなものではなかった。

ところが、時代は一変する。「女性の時代」の到来である。

八〇年代は「女性の時代」と言われた。そして、また、テレビニュー

スも七〇年代の技術革新を経て、転換点を迎えていた。七〇年代、八〇年代を通じて、国内外で大きな事件や事故が相次ぎ、人々のニュースに対する関心が高まっていった。速報性を特徴とするテレビ報道の時代を迎え、テレビにとってニュースは重要なコンテンツとなっていた（北出、二〇一三a、二〇一三b）。

七〇年代末からそれまで男性の専門領域とされてきたニュースの現場に女性が登用されるのが目立つようになる。また、ニュース番組の増加に伴い、女性キャスター（アナウンサー）の活躍の場が広がっていく。

八五年の男女雇用機会均等法成立、八六年の施行に前後して、放送局における女性の雇用に多少の変化が生じた。それまで女性アナウンサーのみ契約制であったのを廃止したり、女性は嘱託であったのを社員化する動きが出てきた。また、女性の採用人数を増加させるとともに、それまで採用しなかった一般職（一般企業でいうところの総合職・営業、報道、制作、技術など）での採用も始まった。

放送の女性たちにとって「冬の時代」は、八〇年代後半になってようやく終わりを告げる。

三 フジテレビ「女子アナ」を創出した下部構造

均等法の施行によって、女性アナウンサーの採用が開始されたことを背景として、直接的に「女子アナ」ブームあるいはアナウンサーのタレント化を押しすすめたのはフジテレビだといわれているが、ここでは、フジテレビという一企業の社内事情に目を向けてみたい。

というのも、瓜生（二〇〇七）による露木茂氏へのインタビューは先見の明があった放送局が意図的に「女子アナ」ブームを創出したのではなく、また、男女雇用機会均等法という外圧の産物として「女性」に光があてられるようになった結果、「女子アナ」ブームがうまれた

わけでもないということを物語っているからだ。

フジテレビでは八一年、フジテレビ革命ともいわれる企業内組織改革が行われた。最も大きな改革は、七〇年代に経営合理化を推し進めるために分社化していた制作セクションを本社に復帰させたことである。その際、出向社員のみならず子会社で採用されていた社員たちもフジテレビ本社採用となった。社内の空気は一変したという。また、その組織改革に伴い、男性アナウンサーと雇用差別のない「フジテレビ正社員女性アナウンサー」がようやく誕生することになる。それまで契約社員だった女性アナウンサーたちも正社員アナウンサーへと移行したのである。

瓜生（二〇〇七）による当時アナウンス副部長職にあった露木茂氏へのインタビューによれば、アナウンサーのタレント化現象は、そうした組織改革のひとつとしてアナウンス部の所属が報道局から編成局に移行したことが大きく、それが新たなテレビ時代に適った女性アナウンサーのありかたを考える機会になったのだという。組織改革によるアナウンサーをめぐる環境の変化は、報道とそれ以外、というセクション主義にとらわれず、さまざまなジャンルにアナウンサーを配置することができるようになったことと、女性アナウンサーにとっては早期退職の枷が外れたことで女性アナウンサーを「育成」する余地が広がったということの意味していた。

八〇年代初頭のフジテレビは「バラエティ」番組を活力源としながら「テレビ」の既成概念を突き崩そうとしており、アナウンサーの育成方針にも「バラエティ」が求められることになった。そして、制作側からはアナウンス能力よりも「番組のキャラクター」として通用する人材^①が求められた。新しいバラエティ番組のなかでのアナウンサーへ向けた演出と、アナウンサーたちによる新しいアナウンサー像の開発に向けての挑戦が、既成のアナウンサー像を瓦解させることになり、「タレントのようなアナウンサー」^②を誕生させることになる。フジテ

女性アナウンサーの八〇年代

レビの企業内組織改革で最も大きなインパクトとなったのは本社復帰した制作セクションだが、彼らの奮起によって、その後、八〇年代を通じて「楽しくなければテレビじゃない」というキャッチコピーとともに新しい趣向のバラエティ番組が開発されてゆく。そして、アナウンサーたちはその番組の構成員のひとりとして「改造」されていった。本社復帰を果たした制作マンたちの心意気、そしてアナウンサーの管理職であった露木氏の「まず画面に出ることを優先する。中身がついてくるのはそれから」だとして、アナウンサーたちを制作現場へ送り出す英断が、フジテレビにおいては、アナウンサーたちのタレント化を後押ししたといっていであらう。

その後のフジテレビの女性アナウンサーたちの活躍は周知のとおりである。八七年の「月9枠」^③で放送された『アナウンサーぶっつん物語』（主演：岸本加世子）が好評を博し、女性アナウンサーのみを集めた『アナ本』が刊行された。八八年に入局した三人の女性アナウンサーを「フジテレビ三人娘」とし、後を追うように日本テレビが「DORA」^④という女性アナウンサーユニットを結成させ、「女子アナブーム」が創出されてゆく。以降、「女子アナ」が商品となることに気が付いたテレビ局は、こぞって「女子アナ」を自前のタレントとして登用し、スターシステムに乗せていくのだ。八〇年代後半には、アナウンサーという職業は、客室乗務員にとって替わり、いやそれ以上に、女性の花形職業として注目されるようになっていった。

四 「女子アナ」らしさの呪縛

報道というジャンルでニュースキャスターとして活躍する女性アナウンサーがいる一方で、「女子アナ」として情報番組やバラエティ番組での司会進行やアシスタント、レポーターとして重宝がられる女性アナウンサーたちが多く存在する。

女性アナウンサーの八〇年代

報道やバラエティ番組への進出など、八〇年代という時代は、女性アナウンサーにとってまぎれもなく大きな転換点であった。以降、女性アナウンサーたちは職域を拡大し、女性アナウンサーという職業は、今や押しも押されぬ花形職業となった。森暢平（二〇〇九）は、八〇年代以前の女性アナウンサーたちの「冬の時代」の反転した姿として「女子アナ」の時代があるのではないかと問うている。もちろんそういった側面もあるにはあるのだが、筆者は「反転した姿」であるというより、「女子アナ」の時代は「アナウンサー像」の転換のなかで起きたひとつのプロセスであり、女性アナウンサーにとって、また別の厳しい季節にあるように思えてならない。

八〇年代以前の、雇用も不安定で「天気予報をよむこと」がメインの業務だった「冬の時代」のあとで、女性アナウンサーを待ち受けていた季節は、穏やかな春ではなく、めまぐるしく変化する季節であった。八〇年代の後半に「女子アナ」ブームという嵐に巻き込まれた女性アナウンサーたちは一様になぜそんなに騒がれるのかわからないと述べており、度重なるバッシングに疲れて退職した者も多い。彼女たちは会社員で、社命を受けて、会社のために「女子アナ」というキャラクターを演じていたといっただけでよい。「女子アナ」としてふるまうことは、会社員として業務を健気に遂行することである。彼女たちはその意味で、優秀で忠義な会社員なのである。

ところで、彼女たちへのバッシングの内容とは、おおよそ次のようなものである。いわく「アナウンスの実力がない」のに「若いというだけでちやほやされている」、会社員なのにまるで「タレント気取り」であるというもの、あるいは「結婚相手を物色しに仕事をしているのか」といったものである。だが、こうした点は本人たちに帰する問題ではない。若年社員がたった数年で熟練の技能を獲得することができらるだろうか。また、職場恋愛はそんなに批判されるものであろうか。批判されるべきは「若くてきれい」なことだけをちやほやする男性的

価値観であり、女性アナウンサーをタレント扱いする男性週刊誌であり、女性アナウンサーをそうした視点で見ない視聴者である。「若くてきれいだが（大した）実力はない」のが「女子アナ」らしさだとするならば、「女子アナ」として経験を積んでいくうちに「アナウンスの実力」とやらを獲得すればよいのだ。

ところが、この「アナウンスの実力」というものが大変わかりづらい。重ねて述べるが、アナウンサーとしての実力、つまりアナウンサーの職能は今や多様化し、「正しい発音」「正しい日本語」だけでは追いつくものではない。現在のアナウンサーに求められているのは、多様なジャンルの番組のなかで番組司会、アシスタント、レポートといったあらゆる役割を多くの出演者のなかで、テレビ局の局員として遂行することである。

多くの番組のなかで「女子アナ」として一括りにされる彼女たちに求められているのは、「正しい日本語」の表現者たる「アナウンサーらしさ」の遂行ではない。^②「女子アナ」らしさというキャラクターが求められているのだ。

ニュースキャスターとして活躍する女性アナウンサーを「女子アナ」とは呼ばない。「女子アナ」とは、あくまで情報番組やバラエティ番組の司会進行役やアシスタントとして重宝がられる存在をいう。それは、画面には出ても出しゃばらず、共演者に気を遣い、テレビ局として伝えなければならない情報を伝える役どころである。番組に彩りを添える役割も担う。また、高度な「清廉性」も求められる。例えば、これほど古典的な「女らしさ」が要求される職業はないのではないか。そして「女子アナ」が果たすアシスタント的役割は、番組進行上、必要なものであるのだが、問題は熟練の技能を要しないという点にある。つまり、「女子アナ」の業務は代替性が高いのだ。^③

アナウンサーたるもの、ニュースキャスターを務められて本物のアナウンサーなのであり、アシスタントではなくメインキャスターとし

てニュース番組を担当してこそ実力があるのだと、アナウンサー自身もそして私たち視聴者も考えている。

瓜生（二〇〇七）は、「『女子アナ』であることによって人気を獲得しながら『女子アナ』であり続けることによってさまざまな可能性をスポイルされてしまう逆説が『見えない定年制度』として現在の『女子アナ』たちを包囲している」（瓜生、二〇〇七：二〇六）のではないかと述べている。

『女子アナ』ブーム誕生から二〇年余。現在の女性アナウンサーたちは「女子アナ」らしさにとられすぎてはいないだろうか。女性アナウンサーたちが、「女子アナ」らしさを期待され、その期待に過剰に適應することで、気が付けば、消耗品として「見えない定年」のなかに囲いこまれてしまう。優等生として会社の期待に沿うべく「女子アナ」らしくふるまううちに、「女子アナ」らしさの呪縛から逃れられない女性アナウンサーを多く見かけるようになった。

その一方で、かつての「女子アナ」のなかから、「女子アナ」から脱却し、現在もテレビで活躍する四〇代女性アナウンサーたちが全国で増加している。

思えば、契約アナウンサーから正社員化した女性アナウンサーが、タレントアナウンサー、つまり「女子アナ」の元祖であったというのに、正社員で採用される女性アナウンサーが「女子アナ」であり続けることで自ら「見えない定年制」に包囲されてしまうといった帰結を迎えるなど、こんなに皮肉なことはない。「会社」のために、社命とあれば、望まない業務もいとわず、二四時間体制で「女子アナ」を演じるなど、これではまるで、かつての「会社人間」そのものではないか。

八〇年代のアナウンサーたちが「アナウンサーらしさ」を改革すること、アナウンサーたちは新しいアナウンサー像を模索してきた。「女子アナ」はテレビ局にとって新しい商品として開発されたが、現

女性アナウンサーの八〇年代

在の「女子アナ」は、新しい「アナウンサー像」でもなんでもなく、旧来型のジェンダー化された女性像の焼き直しに過ぎない。

思い起せば、八〇年代初頭の「女子アナ」草創期の女性アナウンサーたちは、「アナウンサーらしさ」をややすくと改革してみせ、その姿はとてもアグレッシブであった。

「女子アナ」の時代になって久しい。

私たちは、「若くきれいな」女性を消耗品のように使う光景に、女性アナウンサーを「女子アナ」として消費する「『女子アナ』ブーム」に、そして「若くきれいな」ことを消費されることに無自覚な女性アナウンサーにいらだちを覚えていた。また、「女子アナ」らしさから逃れられず、「女子アナ」らしさを繰り返し演じる女性アナウンサーたちに痛々しさを覚えずにはいられない。

女性アナウンサーたちによる「『女子アナ』らしさ」のひそやかな改革を期待したい。

〈参考文献〉

石田佐恵子（一九九九）「『女子アナブーム』を創出する新たな〈有天性〉のメカニズム」『論座』四十七号、朝日新聞社、二〇八—二一五頁。

稲増龍夫（二〇〇九）「局アナはギャラのいらないタレント？」『GALAC』2009年2月号、放送批評家懇談会、二二—一五頁。

瓜生吉則（二〇〇七）「『女子アナ』以前あるいは『一九八〇年代／フジテレビ的なもの』の下部構造—露木茂氏インタビューから—」

長谷正人・太田省一編著『テレビだヨ！全員集合—自作自演の1970年代』青弓社、一九二—二〇頁。

NHK日本放送協会（一九五五）『アナウンス読本』。

大宅壮一（一九四九—一九八二）「アナウンサー論」『大宅壮一全集』

第三巻、蒼洋社、四〇〇—四〇九頁。

女性アナウンサーの八〇年代

北出真紀恵(二〇〇二)「ラジオにおける女性パーソナリティの役割ー女性ラジオパーソナリティへのインタビューから」『マス・コミュニケーション研究』第六一号、日本マス・コミュニケーション学会、一三四―一四五頁。

(二〇〇八)「声」のプロフェッショナルルーアナウンサーの職能の変遷―『東海学園大学研究紀要』第一三三号、五三―六九頁。

(二〇一一)「フリーランスとライフキャリアフリーアナウンサーを事例として」『東海学園大学研究紀要』第一六号、六五―八一頁。

(二〇一三a)「テレビニュースとテレビジャーナリズム」『東海学園大学研究紀要』第一八号、四九―六五頁。

(二〇一三b)「テレビ報道の時代を生きる」林香里・谷岡理香編著『テレビ報道職のワーク・ライフ・アンバランス―13局男女30人の聞き取り調査から』大月書店、四三―五一頁。

小玉美意子(一九九六)「放送の女性史」『女と男の時空 日本女性史再考IV』藤原書店、二三五―二六二頁。

馬場伸彦(二〇一一)「はじめに―いまなぜ女子の時代なのか」『女子の時代!』青弓社、九―一六頁。

林真理子(一九八九)『幕はおりたのだろうか』講談社。

森暢平(二〇〇九)『女子アナ―その冬の時代』『Journalism2009』朝日新聞社、六八―七七頁。

八塩圭子(一九九九)『女性アナウンサーという生き方』日経BP社。

(1) 航空会社に勤務する客室乗務員のこと。スチュワーデスという呼称は(若い)女性の職業としてイメージされることから、米国では七〇年代後半から職業名を「スチュワードス」から「フライトアテンダント」に改められた。現在の日本ではCAキャビンア

テンダントという呼称が使用される。CAは現在も女性にとって花型職業のひとつである。

(2) 同作品が『小説現代』に連載されたのは八八年から八九年。女性アナウンサーという職業に光があてられつつあった八〇年代の二人の女性アナウンサーが物語の主要人物であり、対照的な二人の女性の生き方を描いた。

(3) 石田佐恵子は「女子アナ」バッシングは女子アナブームで扱われる「有名人」は偽りの「有名人」であり、女子アナたちは偽りの「有名人」、つまり本物の実力を持たない存在にところにあると分析している(石田、一九九九)。

(4) 各界著名人男性との結婚相手には客室乗務員の女性が多く、客室乗務員は「美人」「才女」の象徴であった。プロスポーツ選手の結婚相手として女性アナウンサーが増加した理由としては、それまで女性が排除されていたスポーツの現場取材に女性アナウンサーたちが送り出されるようになったことがあげられている。

(5) 八塩圭子『女性アナウンサーという生き方』インタビューたちがこぞって「女子アナ」と呼ばれることに抵抗感を示したことから雑誌連載時のタイトル『女子アナ天国』から上記に変更された。

(6) 二〇一四年、日本テレビにアナウンサー職として内定していた女子学生が、ホステスのアルバイト歴があったことが理由に内定を取り消され、日本テレビを提訴した。日本テレビ側の言い分はアナウンサーには高度な「清廉性」が必要であるというもの。

「女子アナ内定取り消し問題」として論議を呼んだ。(後に、内定の取り消しは取り消され、当該学生は二〇一五年四月に入社した。)

(7) アナウンサーの職能の変遷について詳しくは(北出真紀恵、二〇〇八)を参照されたい。

(8) 草創期は、アナウンサーのことばは「国民のことば」の「標準

となることば」という意味で「標準語」とされたが、現在では「共通語」とされる。

- (9) ただ読むのではなく音読のこと。アナウンサーの教本である『アナウンス読本』では音声表現の意味を込めて「よむ」と表記される。

- (10) 大宅(一九四九―一九八一)は「婦人アナウンサー」についても「彼女たちの存在は、これまでのところでは、男子アナウンサー以上に非個性的である。婦人や子供相手の放送には、男子よりもいいという一般的な理由で、幾人かの婦人アナウンサーが加えられているにすぎない。」と言及し、「愛宕山時代の婦人アナウンサーのなかには、翠川秋子のように愛人と情死するといったような変わりものも出たが、現在はずべてしとやかなお嬢さんぞろいで、箱入り娘が文字通り箱のなかで上品な仕事をしているといった感じ」であると批判している。しかしながら、その一方で「アナウンサーのなかから、すぐれたラジオ・エッセイストや、文芸、演劇、美術、音楽、映画、スポーツなどの専門的批評家がどしどし出ることがのぞましい」とし、専門性とはアナウンス技術だけではなく、専門的知識にあることを示唆していた。

- (11) 司会業に俳優やタレントが進出。現在ではワイドショー番組の司会ではお笑いタレントが活躍し、ニュース番組の司会者にアイドルが登用されるなど、出演者のボーダレス化はますます進んでいる。また、これまでアナウンサーの独壇場であった番組のナレーションの分野にも声優やナレーターという専門職の創出と進出が見られる。

- (12) 大阪・毎日放送では一九八四年からアナウンサー室企画による同局アナウンサー全員出演のテレビ番組『あどりぶランド』が放映。アナウンサー出演による時代劇や体験レポートなどが話題となった。(放送は一九九八年で終了。)

女性アナウンサーの八〇年代

- (13) スターアナウンサーとして歴史に残るのは、ラジオ時代の和田信賢アナウンサー、テレビ草創期の高橋圭三アナウンサー、ワイドショー司会の木島則夫アナウンサー、名テレビ司会者・久米宏アナウンサーなど、いずれも男性アナウンサーたちである。

- (14) アナウンサーが担うジャンルといえば、ニュースのよみ、スポーツ実況がおもなものであった。

- (15) 画面にあわせてアナウンスをするのが仕事であり、「顔出し」はアナウンスしている姿も画面に出ることをいう。

- (16) テレビ局開局と同時に、あるいは前後して入社した女性たちは、一部はラジオ局から移籍、一部は新規採用された。

- (17) 筆者が行ったテレビ草創期の女性アナウンサーへのインタビュー調査では、当時のアナウンサーという仕事は女性にとっていかに先進的なものであったかが語られている。詳しくは(北出、二〇〇二)を参照されたい。

- (18) 筆者が行った女性アナウンサーへのインタビュー調査でも同様のことが述べられている。詳しくは(北出、二〇〇二)を参照されたい。

- (19) フジテレビが女性アナウンサーを正式採用したのは八一年であるが、こうした女性差別的雇用はフジテレビだけではない。均等法施行直前までテレビ朝日の女性アナウンサーも契約制であったし、全国どこを探しても女性アナウンサーを採用する放送局は少なかった。ちなみに在阪局は、女性アナウンサーはすべてアナウンサー派遣会社からのタレント契約であり、派遣アナウンサーの仕事は天気予報と提供枠よみが中心で、番組出演の際には個別の出演料が支払われた。番組に出演するのはアナウンス技術よりも「個性」に重きが置かれていた。筆者は八六年四月から八七年九月まで、京都放送・報道局報道部アナウンス課にタレント派遣として勤務した。当時の業務内容は、社告アナウンス、CMナレー

女性アナウンサーの八〇年代

ジョン、定時ニュース、提供枠、天気予報であった。レギュラー番組はタレントとして出演契約がなされた。

- (20) 田丸美寿々「FNNニュースレポート6・30」(一九七八)、井田由美「NTV今日の出来事」(一九八〇)、吉川美代子「JNNニュースコープ」(一九八四)、小宮悦子「ANNニュースステーション」(一九八五)など。

- (21) 元祖ひょうきんアナといわれた益田由美アナウンサー『なるほどザワールド』(一九八一―一九八六)はそれまで『皇室ご一家』のナレーション担当だった。他に山村美智子アナウンサーの『ひょうきん族』『ひょうきんベストテン』など。益田由美は二〇一五年二月、同局の女性アナウンサーとして初の定年退職を迎えた。山村美智子は現在、俳優として活躍中。

- (22) 月曜日夜9時の若年層をターゲットとした連続テレビドラマ枠。日本を代表するドラマ枠である。九〇年代には「トレンドイドラマ」ブームを牽引した。

- (23) 筆者はこの連続ドラマ放映当時、アナウンス課(報道部・アナウンス課)に派遣、在籍していたが、同僚の女性アナウンサーたちと「アナウンサー」が連続ドラマのヒロインの職業として描かれたことに驚いた記憶がある。

- (24) 八八年フジテレビ入局の有賀さつき・河野景子・八木亜希子。

- (25) 八八年日本テレビ入局の永井美奈子・薮本雅子・米森麻美。

- (26) 八〇年代以降、航空業界の競争激化に伴い、九〇年代に入ると、客室乗務員をめぐる雇用が劇的に悪化した。(それまで客室乗務員の仕事は高収入でも知られていた。)九四年には日本航空が有期雇用制を導入し、「契約スチュワーデス問題」として社会問題化した。

- (27) 各局ともアナウンサーの採用にはマイクテストを課し、またアナウンサーの育成にあたっては一定期間の研修が行われている。

決してアナウンスの技能習得がなおざりにされているわけではない。

- (28) 女性アナウンサーが採用される以前、「女子アナ」的な業務は、契約アナウンサーやフリーランスの若い女性たちが担当した。テレビのアシスタントやレポーターといった仕事には一般公募で選ばれた女性たちが簡単な訓練を受け、そうした仕事についた。筆者が大学生であった八〇年代は、「女子大生」が記号としてタレント化し、テレビアシスタントやレポーター、ラジオパーソナリティ、司会といった領域で現在の「女子アナ」的な使われ方をした。その意味でいうと「アナウンス能力」などというものはほとんど期待されていないが、「若くてきれい」であることが条件となっている点においては一致している。

- (29) 女子アナは三〇歳を過ぎると仕事がなくなるといふもの。三〇歳前後で退職し、フリーランスになるものも多い。